

---

# 魔獣使いは我が道を行く

睡蓮 鏡華と朽紫那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔獣使いは我が道を行く

### 【Nコード】

N8119X

### 【作者名】

睡蓮 鏡華と朽紫那

### 【あらすじ】

神崎玖惹は、いつものようにポケモンを売買している研究者達をばごぼこにしていたが、一人の研究者に銃で撃たれてしまう。一緒に戦っていた相棒達に分かれを告げ死んでしまい次に目覚めたときには、伝説のポケモン「アルセウス」に出会い転生の話を持ちかけそれを受け入れた。彼女は転生し「リボン」の世界へ…。



## 紹介（前書き）

リボンとポケモンのコラボはどうだろうと思いついてみました。

## 紹介

名前 神崎 玖惹

フリガナ カンザキ クジヤ

性別 女

年齢 ツナ達と同じ

身長 165センチ 体重 50キロ

一人称 私

誕生日 7月7日

性格 無表情がいつもの顔で、心を許した人にしか笑わない

髪の色 黒

目の色 青

髪型 ショートだが耳の部分だけ鎖骨ぐらいまでの長さ

着る服 白い服や、王冠の入ったプリントTシャツを好む。

必需品 モンスターボールに入ったポケモン

携帯 財布 ベージュのポーチ

備考

ポケモンと共にやってきた転生者

ポケモンを「家族」または「相棒」と呼び、傷つける輩やから  
は容赦ない制裁を下す

また人と関わることを嫌う

そのため周りの人から孤立しがち

現在は並盛の廃屋に暮らしている

廃屋から並中まで十キロ離れたところにある。

（ちなみに学校へ登校する時はサーナイトのクレメンスの持つ技「テレポート」で登校する）

一応武器はあるが、基本的に魔獣を使って戦う

一言

「私と関わるなら精神科へ行くことをお勧めするよ」

名前 清水 由香

フリガナ シミズ ユカ

性別 女

年齢 ツナ達と同じ

身長 152センチ 体重 49キロ

一人称 ウチ

誕生日 11月11日

性格 優しい

髪の色 黄色

目の色 茶色

髪型 ショート

着る服 水色やピンクといった服を着る

たまに奇抜な服を着る

必需品

代々清水家に伝わる短刀「雪羽」ゆきはね

携帯 財布

備考

トリップ者

裕福な家庭で育った

現在はマンションで独り暮らし

いる  
神様からは治癒の能力と最強設定を特典としてもらって

一言

「私に嫌いな人なんていません。皆いい人なんです」

注意事項

・普通は4つの技しか使えませんが、この小説では秘伝技や技マシ  
ンで覚えられる技を使います。



- ・レベルは無限大です。なので無限大に強くなります。
- 進化は主人公の見極め?となります。
- ・主人公は都合上6体以上のポケモンを使います。

## 紹介（後書き）

玖葱の手持ちポケモンはのちほど公開します。

とりあえず、私がい実際に使っているポケモンと玖葱が使いそうなポケモンを出そうと思います。

〈質問コーナー〉

皆さまの好きなポケモンは何ですか？

私は、サザンドラとブラッキーにランターンなどが好きです。

ではまたいつか投稿をしたいと思います。

## 今いる世界にサヨナラを（前書き）

そう言えば伝え忘れがありました。

ポケモンは玖葱の使うポケモン（控え軍も合わせて15匹）

しか出てきません。

玖「すみませんね…作者がバカで」

…主人公こんなドSでしたっけ!?

玖「こんな作者はほっ」として本文をどうぞ」

## 今いる世界にサヨナラを

自分が、死ぬ時は誰かに殺されてしまっただろうと感じていた。

いや…病気で死ぬこともあっただろうが。

物心ついてから、私は悪さばかりしてきた。

人のポケモンを強奪、建物を自分のポケモンを使って破壊はもちろんのことで、

人に対しての暴言は毎日のこと。

だからこんな自分に友達はいないし、近づくことすらなかった。

だからこんな自分にもいつかは、天罰が下ると思っていた。

で、今私はその危機に直面している。

今日もいつも道理、自分のストレス解消のためにポケモン売買や虐待、

実験をしてるアジトに堂々と私の相棒達と正面から乗り込み研究者たちを制裁していた。

オリに入っていたポケモンたちを解放をしようとしたところで、まだ気絶していなかった研究者が…

銃で私の手持ちポケモンの一匹であるハピナスのアロエを撃とうとしていた。

それに気付いた私はアロエを押しつけ撃たれた…ッというわけで。

「ハピィッ!」

今、アロエに治療されているが傷口はなかなか消えないのが自分でもわかる。

「うるさい…もついいよ。直らないから」

「ピィ!」

嫌だとしても言うようにやめようとしなない。

アロエの目からは大粒の涙がボロボロ私の腕に落ちる。

なんで私なんかのために泣くのか理解しがたいよ。

アロエのほかに、エネコとか、サザンドラのタナトスとか…

何でそんな泣きそうな顔で見るのさ。

「…泣くやつは…嫌い…だよ」

赤く染まった手でアロエの目を触ると、綺麗なピンクの肌が血で汚れてしまう。

「…私のために泣く奴はもつと嫌いだ」

ああ、もう眠い。

死ぬ時は走馬灯が見えるとかいうけど全くもって見えないし。

もう、耳まで遠くなってきた。

…でも、

「君達は相棒であり家族だから…特別に許してあげるよ」

私が初めて認めた相棒達よ。

「ごめんなさいは言えないけど、

「私は…幸せ…でした…！」

感謝だけはしてあげる。

今までこんな私といてくれてありがとう。

そして

サヨウナラ

私が最後に見たのはアロエとダークとエネコの泣く顔。

ああこれでいいや…次に会うことはないよね。

もう私を忘れて、幸せになってくれることを願うよ。



## 今いる世界にサヨナラを（後書き）

主人公は基本的、最終進化を遂げたポケモンにニックネームをつけます。

なので、文中に出たエネコは、名前はまだつけられていません。

初めまして、行ってきます

私が目を開いて思ったこと…。

何も無い。

ただ真っ白な世界が広がっている。

何処を見ても、白、白、白。

もしかしてここは噂の死んだ人が来るところなのだろうか？

地獄？ それもあり得はしないけど天国？

『ここは異世界の狭間』

「は？」

頭の中で響く声。これは一部のポケモンが使えるテレパシーだ。

私の目の前が暗くなったので視線を上げると、

そこにいたのは細くしなやかな純白の身体、

宝石のようなパーツが埋め込まれた金属的な質感の装飾状部位は金色で、

たてがみ状のパーツが頭部にあり4足歩行で白馬を思わせるシルエットの姿を持つポケモン。

「伝説のポケモン様であるアルセウス様を拜める時が来るとは思いもせませんでしたよ」

『フフ…初めましてだ。 玖惹よ』

「あなたのようなポケモンがこんな私にどんな御用で？」

『玖惹よ、あなたは死んだのだ』

「…いきなり何？ そんなこと分かってるよ」

『そなたのおかげで組織が壊滅し事件は解決した。』

『そなたの犠牲とともに…』

「ふーん…で？」

『我はそなたを気に入っている。』

そなたが死んだとき我は悲しんだ』

「…一度ポケモン専用の眼科へ行けば？ それか精神科にいったいで」

話しが繋がっていないよ？

何が言いたいのかな？

『なあ、玖惹よ』

「何？」

『違う世界で生きなおさないか？』

「…は？」

このポケモンとんでもない爆弾を落としたよ。

「この私が？　生きなおす？　理由を聞かせてほしいな」

『我がそなたを気に入ったからだ』

そんな理由？つと言おうとしたがアルセウスはなかなか私から視線を外さない。

『我はそなただからこそ生きてほしいのだ』

私だからこそ？

「私だからこそ？　…でもさ私なんかを転生させても良いな訳？」

『問題ない、我は神の存在だから作るのも壊すのも我が決めること』

「じゃあ、私とその新しい世界でその世界を壊そうとするのなら？」

『そなたは、悪を壊しても世界を壊さない』

「知ってるような口ぶりだね」

『知っているからな』

アルセウスが笑っているように見える。

まるで、親友と話しているような気持ちになってくる。

…まあ、別に新しい世界で気ままに暮らすのも悪くないね。

「いいよ。貴方の願い聞きいれるよ」

『そうか。では特典も入れよう今頃アイツも説得をしているところだからな』

説得？ 誰を。まあ良いけど。

『さて…そろそろ別れの時だ』

「ふーん、じゃあまたいつか会えたらいいね」

『そうだな』

私の体がだんだんと透けて薄らいでいく。

どんな世界に行くか分からない。

どんな特典がつくかわからない…けど。

「ありがとう…アルセウス」

『そなたに数多くの幸があることを祈ろう』

まあそれなりに頑張って次の世界を、私なりに楽しんでくるよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8119x/>

---

魔獣使いは我が道を行く

2011年10月26日11時19分発行